

平成 23 年度名誉員 野嶋 孝 氏

～全体最適の視点で万事にあたる～

松浦 昌則

中部電力(株)

 電力流通システム, 全体最適, 中長期ビジョン

1. はじめに

野嶋孝氏は長年中部電力(株)に勤務され、基幹系統計画の策定業務に長年携わるとともに、電力流通設備全般にわたる技術開発に広くリーダーシップを発揮され、電力技術の発展に大きく貢献されるとともに、ファイナセラムックスセンター(JFCC)理事長や中部科学技術センター会長など社外団体の要職を歴任された。

また、電気学会においては、会計理事(1995年)、副会長(1996年)、会長代理(2005年)、会長(2006年)を歴任され、会長時には、共通英文論文誌の発行による学会ステータスの向上、IEEJプロフェッショナル制度の定着を始めとする人材育成や技術者継続教育等の推進、活動活性化策として部門活動資金制度の新規導入などを図るとともに、学会としての戦略的な対応に向け、学会のあるべき姿としての「グラウンドデザイン」を策定された。

2. 聞き取りの概要

2.1 少年時代～大学時代

野嶋氏は1935年に静岡県庵原郡興津町興津(現在の静岡市清水区興津本町)で生まれ、大学入学まで地元で過ごされた。自宅の前には中部配電(現在の中部電力)の配電分駐所があり、分駐所に詰めていた配電技術者が周囲から親しみを持って迎えられていたことが記憶によく残っているとのことである。

大学は東北大学工学部へ進学された。当時は「電気は国の宝」とか、「産業の米」と言われ電気そのものが社会に非常に役に立つというイメージがあったことと、幼少期からの電力会社の配電分駐所の印象が強かったことから迷わず電気工学を専攻された。就職にあたり、かねてから興味があった電力会社を志望し中部電力へ受験申請を出されたが、何かの行き違いで受験申請書が中部電力に届いていないことが判明。会社に掛け合い、最後の一枚の面接を受けられ無事合格された。この時気付かなければ野嶋氏の人生は全く変わっていたかもしれないというエピソードが残されている。

2.2 中部電力時代

(1) 本店系統技術課・企画課～静岡支店工務部時代
入社後2年間は研修期間で、最初の1年目は変電、送

電・配電・営業などさまざまな業務を経験され各部門の仕事ぶりや苦労を経験された。研修2年目は本店給電課で、電圧管理・需給バランス・制御技術計算・研究など系統技術業務を経験され静岡支店給電課へ本配属。



野嶋 孝 名誉員

その後異動された本店系統技術課では、計画係として名古屋市長期供給計画の策定に従事され、「名古屋市中心部への超高圧導入を踏まえた中間電圧の整理構想」、「変電所の標準結線形態の決定」、「変電所母線標準容量、送電線標準サイズ整理」、「地中管路への計画管路方式の導入」など、20年後を見据えた数々の供給計画の立案に携わられた。引き続き、本店企画課では、1974年の電気料金改定作業に原価算定担当として携わられ、経営の根幹に係わるコストについての理解を深められた。

(2) 中央電力協議会派遣時代

静岡支店工務部勤務の後、1978年から中央電力協議会へ派遣され、「大電力輸送構想」を検討するための事務局業務を担当されている。また、この他に「全国電力供給計画の概要(通称:青本)」の取りまとめも担当された。この年には各電力会社で電気料金改定申請が予定されていたことから、料金申請事前検討用・料金申請用・改定後の翌年度用と1年間に3度の青本改定を経験されている。

(3) 本店企画部課長、工務部工務業務課長時代

1981年に中部電力本店企画課へ戻られた。当時は通信事業の自由化検討が始まるなど電力事業経営を取り巻く環境の変化が激しくなってきた頃であり、先行する海外の実体を調査するためアメリカへ調査に出向かれ、コジエネ・配電地中化・通信自由化などを調査されている。現地で実際に調査を進める中では、それまで国内で読んでいた調査資料は情報が古かったりすでに状況が変わったりしていて、実態をつかむためには自分で調査する必要があると再認識された。1986年からの本店工務部業務課時代には、第一線事業所の再編、ならびに中央送変電建設所(通称:中送建)に設計技術Gを設置されるなど組織見直しを主

導された。

(4) 中央送変電建設所設計技術 G 主幹時代

1988年には中送建設計技術 G 初代主幹として赴任された。それまで計画的な仕事が多く現場技術の経験がなかったが、実際に着任してみると中送建は想像以上にプロ意識を持った技術集団で大変驚かれた。送電線・変電所の建設地点選定などは、送電、変電各々が個々の最適設計を主張し平行線となることもしばしばであったが、野嶋氏はこれまでの経験から全景を俯瞰し全体最適で物事を判断する必要性について粘り強く指導され、大幅なコストダウンを実現してみせることで所員の支持を得ていった。当時中部電力では500 kV 第二基幹系統構築の時代であり、「低減絶縁500 kV ガス絶縁開閉装置 (GIS)」、「500 kV 分解輸送変圧器」、「大東径・低インダクタンス500 kV 送電線」、「275 kV ケーブルの現地架橋技術」などさまざまな新技術を導入された。

また、設計に関しても当社初の500 kV 全 GIS 導入にあたり、重電三社の技術提案を一つひとつ評価し最適な提案を採用する「設計コンペ方式」を採用されている。中送建の変電屋はそれまで現場設計・施工管理技術では高いレベルにあったが、メーカ技術を評価する経験が少なかったことから、皆が総力を挙げてその評価に大変な時間と労力を注ぎ込んだ。最終的にはユーザとしてメーカ想定設計寿命を超えて運用する責任があることを踏まえ、大局的な観点から評価・判断を下されている。これ以降、中送建の変電屋は機器設計技術についても大きな自信を持つようになった。

(5) 東京支社副支社長時代

東京支社副支社長時代の最大の課題は清水石炭火力の開発推進であった。当時静岡県清水市三保地区に土地を確保し地元の了解も大体取りつけていたが、なかなか県議会の了承が得られず最終的に断念せざるを得なかった。野嶋氏の地元ということもあり残念でならなかった思い出である。

(6) 工務部長、企画部部長時代

1993年からの工務部長時代は電力自由化の問題がクローズアップされ始めた頃であったことから、電力自由化の導入検討が進むヨーロッパ（イギリス・フランス・イタリア・デンマーク）の調査に出向かされている。また、企画部部長時代には、電源導入促進のための長期入札制度導入検討に尽力された。

(7) 技術開発本部長時代

1999年からの技術開発本部長時代は、需要が一段落し電力設備拡充計画がストップしたような状態であったが、将来に向けての種蒔きを行うべく、研究開発の長期ビジョン・アクションプラン策定に2年間かけて取り組まれた。

(8) 副社長時代

2001年からは、副社長として主に流通関連部門を統括

された。当時は電力の小売り部分自由化も始まり、全社で海外事業展開を進める機運が高まってきた時期であった。

工務部門における台湾での設計コンサルティング事業では野嶋氏自らトップ営業として都合3度台湾へ出向き先方との親交を深められ順調に受注を拡大された。

また、この頃、系統運用部門が開発した「オンライン系統安定化装置 (TSC)」がアメリカのエジソン電気協会からエジソン賞を受賞している。

(9) 顧問時代

顧問に就任後は社外役員をいくつも歴任されている。

JFCCは、主にセラミックス、金属などの材料に関する最先端の研究を専門的に行う公益法人であり、研究内容は世界のトップクラスをリードするレベルで、大変興味を持たれた。また今やJFCCの大きな武器となっている、ナノ構造研究所の開設に大いに力を注がれた。

中部科学技術センターは、中部地域全体の技術力アップのために主に地元の中小企業に対して研究開発支援を行う事業を行っており、今後も引き続きの支援継続を望まれている。

2.3 電気学会会長就任

2006年5月に第93代の電気学会会長に就任され、電気学会の活動を戦略的に進めるための「中長期ビジョン」策定に尽力された。この時策定された中長期ビジョンは現在でも活用されているが、野嶋氏は「一度作ったビジョンにいつまでも拘るのではなく、時代の変化に合わせてどんどん見直して発展させていっていただきたい」と述べられている。

3. おわりに

以上のように、野嶋 孝 氏は全体最適の視点から万事にあたり、電力技術の発展に寄与するとともに、学会活動におかれては、各役員就任を通じ広くリーダーシップを発揮され、学会の発展・活性化に多大なる貢献を果たされた。

聞き取り実施要領

実施日時：2014年1月8日（水）14：00～17：00

実施場所：中部電力本店会議室

聞き手：松浦昌則（中部電力(株)）

松山 彰氏（(株)シーテック）

川北浩司氏（中部電力(株)）

同席者：電気技術オーラルヒストリー調査専門委員会

山本正純委員長（三菱電機(株)）

木村達也幹事（(株)東芝）



松浦 昌則

まつうら・まさのり（上級会員）

1978年3月京都大学工学部電気工学科卒業。同年4月中部電力(株)入社。流通本部系統運用部長、流通本部工務部長を経て2013年7月より取締役専務執行役員流通本部長。